
黒姫物語

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒姫物語

【Nコード】

N2795P

【作者名】

朋次郎

【あらすじ】

。むかしはなしです。

摂津の国の奥深くに小さな国がありました。

領地はほとんどが山地であり、それゆえに農作物もほんのちよっぴりしか取れませんでした。

だけどその国の住民たちは皆仲良く無欲でただ毎日おいしくごはんが食べられて楽しく働ければよしとする人たちでした。

さてこんな小さな国にも小さなお城が1つありました。そこにすんでいるお殿様の名前は高梨さまといって民の信望厚く優しいお殿様でした。このお殿様には6人の子供がいてそのうち5人は男の子で最後の末っ子だけが女の子でした。奥方様はその6人目の女の子を産んだ後亡くなられましたので、お殿様はその子を特に不憫に思われ大切に育てられました。

6人の子供の名前は本名の他に年の上から、白―緑―黄―青―赤―黒と色にちなんだ愛称を与えられていました。一番末のお姫様は黒でしたのでお城の人たちから黒姫様と呼ばれ5人のお兄様たちに囲まれ幸せにすくすくと育っていききました。

黒姫様が15歳になった春のころです。5人のお兄様方と一緒にお花見にでかけました。美しい桜の花と青く澄んだ空と、雪の残る白い山々を見てうれしくなった黒姫はお兄様方や村人たちを前にして歌を歌い扇を持って舞いました。桜の色と同じ桜色のお振袖を着てのびやかに舞う姫の姿に、皆等しく春の到来を感じて喜びを分かち合ったのでした。

ところが楽しかったお花見の帰りにちよつとした事件がおこりました。5番目の赤のお兄様の乗っていた馬が急にいないて棒立ちになり、お兄様が馬から落ちてけがをしてしまいました。従者たちがあわてて馬の手綱をひきよせると足元に大きな黒蛇がとぐろを巻いていました。皆はこの蛇のせいで馬が驚いたのだと言いました。

怒った4番目の青のお兄様は蛇を蹴飛ばし3番目の黄のお兄様は蛇を小突き2番目の緑のお兄様は蛇をふんづけ、1番目の白のお兄様は剣を取りつつ蛇というものは人目のつかないところにいるものなのに何故こんなところに出てくるのか、人間や馬を驚かせる不埒者めが！とののしって斬ろうとしました。

この様子を見た黒姫は輿から下りると蛇の前に立って白のお兄様の剣を防ぎました。そして黒蛇を助けるようにお願いしました。

「今日はせっかくのお花見でしたのに。蛇を許してやってこのまま楽しい気分で帰りましょうよ」

そして怪我をした赤のお兄様には「大丈夫ですよ」と寄り添い蛇の方には「長い冬眠から覚めたばかりで少し寝ぼけていたのですよ。早く自分の巣にお戻りなさいよ」とほほえみかけてやったのでした。

もう娘とっていいくらいなのにその童女のような仕草に人びとは思わずつられてなごやかに微笑みあいました。白のお兄様も苦笑して剣をおさめました。

そしてみな、黒蛇を踏まないように気をつけて、白までの道を何ごともなかったように、のんびりとした気分で帰っていきました。

黒蛇は人々が去った後でも黒姫に感謝するかのようにじつと鎌首をあげて城の方を見ていました。その様子はまるで人間のように何ごとを思案しているようでした。

数日後のある日のことです。

立派なお侍達の行列が城に向かい、城下の人々を驚かせました。行列の中心にいた侍はまだ若く、凜々しく、そして毅然とした態度で周りを圧していました。まわりのお侍達は皆その若者の従者でした。一同は非の打ちどころのない装いでしたがただ紋がないのでどこの国の人たちかわかりませんでした。

不思議がる城下の人々を後に、お城に到着するとさっそく若者は城主の高梨様に面会を申し出ました。殿様はこの得体の知れぬ若者

を大層警戒しておいででしたが、礼儀をわきまえた立派な態度を見てもしかしたら身分ある方がおしのびでこの国にやってこられたのかも・・・と思い直して会うことにしました。

お城の中で一番いいお部屋に通して、後継ぎになる白のお兄様と一緒に迎えたのです。

若者は殿様と対坐すると開口一番にこう言いました。

「私は黒竜と申すものでございます。このお城にいる黒姫様に結婚を申し込みたく参上いたしました」

殿様は予想もしなかった黒姫の縁談にびっくりしましたが、丁重に

「まずそなた様のご素性をお明かしください」

と言いました。

黒竜はにこつと笑うと

「実は私はこのお城から見えるあの山にすんでいる竜なのでございます。人間はあなたが統治していますが自然と動物は私が統治しております。このたび私が人前にでたのは理由があります」

ぎょつとして黙り込んだ殿様に黒竜は話し続けました。先日のお花見の折に赤のお兄様の馬を驚かせて落馬させてしまった実は黒蛇は自分であったこと。このときに城のお兄様に斬られそうになったが黒姫に危ないところを助けてもらい感謝していること、そしてやさしい黒姫が忘れられなくてお嫁さんにしようと決めたこと。

「- それゆえ、結婚のお許しをいただきたく参上しました」

「だつ 黙れ！黒竜！」

殿様は怒鳴りました。

黒竜は一瞬黙りましたが重ねて

「私との結婚をお許し願えば黒姫は人間以上に幸福になります。何不自由のない暮らし、そして永遠の若さと美しさが与えられます」と言いました。

黒竜の態度はあくまで礼儀正しいものでした。だけど殿様は、黒姫はきちんとした人間にお嫁にやるつもりだと冷たく言い放ちました。隣にいた城のお兄様は気性が荒かったので化け物には姫はやれ

ぬ！とはつきり言いました。

黒竜はしばらく黙っていました。

「確かに私は人間ではありませんがどんな人間よりも姫を幸せにしてやれるですよ。喜んでしかるべきなのにどうしてそんな態度を取られるのですか、ああ、こんな扱いを受けるのであればいつまでもいわずに黒姫をさらうべきであつたか」

とため息をつきました。

これを聞くなり白のお兄様はものすごく怒って立ち上がり、
「もう我慢ならぬ！このあやかしの妖怪め。いい加減にしろ！」
と剣を抜いて黒竜に斬りかかりました。

その瞬間、黒竜はキツと眼を光らせました。

すると白のお兄様は身体がこわばって動けなくなりました。黒竜はお兄様の手から剣が落ちたのを見届けると目を伏せました。するとお兄様は再び動けるようになりました。が、殿様と2人、これは大変なことになってしまった、早くこの化け物を追いやらねばならぬと青い顔を見合わせるのです。

ややあつて殿様が

「ここを去ってくれるには何をさしあげたらよからうか、金がいいか、銀がいいか」

とおそろおそろ、なだめすかすように問いますと黒竜はむっとしたように

「私は姫が欲しいのです。私はどうすれば、あなた方に気に入ってもらえるのですか」

この時お殿様に妙案が浮かびました。

「黒竜よ、私の言う通りのことをしてみよ。やりとげたら姫はそなたのものぞ。しかし失敗したら2度とこの城に現れてくれるな」

白のお兄様はびっくりしましたが殿様の耳打ちでうなづきにやりと笑いました。

黒竜はそんな二人の様子を不安げに見ていましたがやがて殿様の提案を聞いてみるみるうちに喜びの表情があらわれてきます。

殿様の提案はこうでした。明日の朝、自分はこのお城の周りを馬で21周走る。お前ははだして私の後を走るのだ。遅れずに最後までついてこれたら望みをかなえてつかわそうぞ．．。

黒竜にとってはこの提案は思いがけず、たやすい申し出で

「やりましょう！」

と自信たっぷりに答えました。そしてこの機会をくださってありがとうございました。とすごします、と殿様たちに感謝のお辞儀を何度も繰り返したのでした。

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

次の朝

前日にかわされた殿様と黒竜の約束を聞いた城下の人々はお城の周りを囲んで試験を見ようと騒いでいました。

周りの人々の騒ぎようとは別に5にんのお兄様と黒姫はお城の一番高いところにある部屋から、試験の様子を見るために集まっていました。

黒竜の望みを聞かされた当の黒姫の心中は複雑でした。

この私が、あのお花見のときに見た蛇、黒竜のお嫁さんになるなんて！

「蛇と結婚するなんて嫌でございます」

思わず泣きだした黒姫にお殿様やお兄様方はだいじょうぶだ、黒竜なぞに姫はやれぬから、と言つたのでした。そしてこの試験であるの身の程知らずの黒竜は死ぬことになっていゝと言いました。

お殿様の策略はこうでした。

黒竜がお城を21周する間に死んでしまうように、まわりの道の下に何千本もの刀をさかさにして埋めて細工してあるのだと。お殿

様はこの道を厚い蹄鉄を打った馬に乘ります。黒竜は裸足でお殿様の後を走るのでした。けれど刀や槍が邪魔をして走れないでしょう。刀や槍で身体が貫くのを覚悟して走っても21周する間に出血で死んでしまふに違いない。どうやっても黒竜はお殿様に勝つことはできないでしょう。

これを聞いた黒姫は安心もしたのですが、黒竜を騙すやり方にふと後ろめたい感じを覚えました。だけど自分は人間ではないものに嫁ぎたくありませんでしたので黙って見過ごすことに決めました。

さて朝日さす中、どこからともなく立派な身なりをした黒竜がやってきました。

殿様ははや、馬上にいます。そして黒竜のあいさつにも答えず「ゆくぞ、黒竜。21周走る間、遅れずについてゆくことができれば、姫はそなたのものぞ」

と言うなり、馬に鞭をあてて走り出しました。黒竜も走りましたが、2、3歩踏み出した時に刀の切っ先が足を刺したのか立ち止まりました。瞬間、黒竜は殿様の計略がわかったのでしょう。けれども彼はすぐに顔をあげると馬上の殿様を追いかけはじめました。国中で一番早く走る馬の後を自分の足で走るのですから大変です。その上土の中から刀や槍が鋭利な切っ先をのぞかせているのですから、普通の人には歩くことすらできないでしょう。でも黒竜はがんばりました。一生懸命走りました。

城の周りを1周走っただけでも足はもう血まみれになりました。5週も走るとみるうちに黒竜の身体が変わってきました。

まず足の方からウロコが生えてきました。だんだん身体が大きくなり、そして長くなってきました。黒竜の身体は人間から元の蛇に、そして龍の身体になってしまったのです。元の身体に戻ってもなお、彼は走っていました。

殿様は全速力で馬を走らせとうとう約束の21周を回り終えました。さて、黒竜のやつ、ついてこれてはいまい、と満足の態で後ろ

を振り返りますと、あにはからんや黒竜は血まみれ姿ではあはあ息を切らせてた立っています。やわらかい春の朝日さす中、血まみれ道上に血まみれ龍が1匹。

その龍が、お殿様、お殿様、私は約束を守りましたよ。これで黒姫を私のお嫁さんにもらえますよね、とはずんだ声で言うではありませんか。

お殿様は愕然として黒竜のひげ、緑色の瞳、真っ赤な舌、全身にはえているウロコ、長い胴体、鋭い爪をもった4本の足を見ました。そしてついに語気荒く

「そんな化け物に私のかわいい姫を嫁にやれるもんか！」と怒鳴りました。

黒竜はすぐぐがっかりして、殿様が約束をおやぶりになるのですか、と問い詰めました。殿様はそんな約束はした覚えはないとつっぱねました。2人の押し問答の合間に5にんのお兄様方が武装をして城から出て黒竜に向かって剣を構えました。大勢の家来たちも黒竜を取り囲んで弓矢を引き絞りました。

殿様は勝ち誇ったように

「それ、化け物を殺せー」と命じました。

無数の矢が引き放たれたその時、黒竜の姿が一瞬のうちに何十倍にも何百倍にもふくれあがりました。同時に晴天がにわかにかき曇り夜のように真っ暗になったかと思うと雷がばりばりと鳴りました。見る間に黒竜は空を駆け上り、お城の上空をぐるりと巻いて囲みましました。そして恐ろしく怖い声で

「この約束破りめ、私の真実の力を目にもみせてくれようぞ」と一言だけ言いました。

この言葉をいうなり黒竜の抑えられていた怒りが爆発したのでしよう、ひどい雷雨と竜巻がおこり、お城の領地内のあちこちで悲鳴

がひびきました。

雨量があつという間に増して川に水があふれ山崩れがおこり村人たちがおぼれたり生き埋めになったりしました。

殿様やお兄様は村人たちの苦しみを目の前にしてもなすすべはなく、ただただおそれおののいて空を仰ぎ見るばかりでした。

この様子を見かねた黒姫は嵐の中一人でお城の屋根のてっぺんまで登り、嵐に飛ばされそうになりながらも、黒竜に向かって叫びました。

「黒竜様！貴方の想い、うけとめましょう。父のしたことはあやまります。どうかこれ以上、村人たちを苦しめるのはおやめください！」

すると姫の声が聞こえたのか天からやわらかい光がさし、辺りを照らしだしました。どこからともなく美しい虹色の光の玉が出て黒姫のまわりを囲むと姫の身体は宙に舞い空高く飛んでいつてやがて見えなくなりました。

嵐は静まり水は引き、皆一同ほつとしました。黒姫が自ら黒竜のもとへ行ったことで黒竜の怒りが解けたのでしよう。黒竜は村人たちの苦しみをなくすために自分の身を奉げた姫の心を尊んで大切にしました。そして姫がさびしがないように生まれ故郷の里が一望に見渡せる高い山のほとりに御殿を建てました。黒姫にとつては人間界にいたころとは違い動物達にかしずかれまるで仙人のような暮らしでした。姫は最初黒竜が怖かったのですがだんだん彼の誠実なやさしさにひかれ、お嫁さんになることに決めました。

黒姫は結婚後も時々山から下りて人間界にいるお殿様やお兄様方に会いに行きました。

お殿様は黒姫の何不自由のない幸せな様子を見て自分のした過ちを悔いて黒竜にわびました。黒竜は義父を許し、毎年領地に自然の恵みを豊富に与えることを約束しました。

彼らは毎日楽しく暮らしました。

めでたし、めでたし。

（後書き）

黒姫の住んでいた山は黒姫山と名付けられており、現在も長野県内にあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2795p/>

黒姫物語

2011年1月21日22時40分発行